専修人文論集 113号
（2023）209-234

明治30年以降の行司番付再訪（資料編）

根　間　弘　海*

１．目的[1]

本稿の目的は，明治30年から45年までの行司番付を階級や房色で示すことである。昭和以前の番付は傘型であったので，階級の境目が明確でない[2]。それを現代風に，横列型に配列し，一見するだけで階級を見分けられるようにしてある。階級がわかれば，房色だけでなく，序列も容易にわかる[3]。

以前にも，明治30年以降の行司番付は，拙著で公表したことがある。

- 『大相撲行司の伝統と変化』（2010）の第４章「明治43年以前の紫房は紫白だった」と第９章「明治30年以降の番付と房の色」。（本稿では『伝統と変化』と略す）

これは傘型の番付をそのまま受け入れ，階級と房色を提示している。一見しただけでは，階級や序列を見分けるのは容易でない。二つの階級が一段に記載され，しかも階級間の境目が見分けられないこともあるからである。本稿では，それを階級ごとに分けてあるので，簡単に見分けられる。

以前の拙著『伝統と変化』でも房色は提示してあるが，紫房と朱房を細かく区別してなかった。公表した当時，紫房に４種あることや朱房に２種

＊専修大学名誉教授

あることの知識が不足していたからである。

本稿では，紫房の場合，４種のどれであるかを提示するよう心掛けてある。その４変種とは，次のとおりである。

- 紫房の変種

  １．総紫房　　すべて紫糸。

  ２．准紫房　　白糸が約２，３本混じっている。

  ３．（真）紫白房　　白糸が約２，３割混じっている。

  ４．半々紫白房　　白糸が約半分混じっている。

紫房の４変種に関してはこれまでの拙著にも詳しく取り扱っているので，それを参考にしていただきたい。

- 紫房の４変種を扱っている拙著

  １．『大相撲行司の房色と賞罰』（2016）の第３章「「明治の立行司の紫房」

  ２．『大相撲立行司の軍配と空位』（2017）の第１章「紫房の異種」と第２章「准立行司と半々紫白」

  ３．『大相撲立行司の名跡と総紫房』（2018）の第１章「紫白房と准紫房」

  ４．『大相撲の行司と階級色』（2022）の第６章「課題の探求再訪」

  ５．『大相撲行司の格付けと役相撲の並び方』（2023）の第５章「紫房行司一覧」と第８章「准立行司と半々紫白房」

さらに，朱房行司にも二つある。草履を履くか否かで，二つに分かれる。

- 二つの朱房行司

  １．三役行司　　草履を履いている朱房行司

  本稿では，「朱房・草履」として表す。

2．幕内行司　　草履を履かない朱房行司[4]

本稿では，「朱房・足袋」として表す。

この二つの朱房行司については，拙著にも詳しく扱っている。

- 二つの朱房行司を扱っている拙著
  1．『大相撲行司の軍配房と土俵』（2012）の第５章「草履の朱房行司と無草履の朱房行司」
  2．『大相撲の行司と階級色』（2022）の第４章「大相撲の三役行司再訪」
  3．『大相撲行司の格付けと役相撲の並び方』（2023）の第１章「大相撲朱房行司の変遷」

昭和以前の房色の使用許可で注意すべきことがある。それは許可年月が不定期だったことである。場所中だったり，その前後だったりする。また，番付発表の前後だったりもする。そのため，特定の行司がその房色をいつから使用したのか，厳密な年月を知ることは必ずしも容易でない。建前としては，免許が届いてから，房色を使用したらしいが，実際にそのとおりだったかどうか，確かでない。本稿で提示してある年月には，１，２場所の変動があることを指摘しておきたい。

本稿の分析と以前の拙著『伝統と変化』の分析が一致しないこともある。その場合は，本稿が優先する。違いがあった場合，それを一つ一つ取り上げ，指摘していない。その意味では，『伝統と変化』にもぜひ目を通していただきたい。行司番付だけに集中し，階級や房色を詳細に分析した論考や著書は非常に少ない。以前公表した拙著の論考でも，すべて正しかったとは言えない。どの拙著でもミスがある。そういう不備は私自身がよく承知している。本稿にもまた，不備があるかもしれない[5]。そういう不備があるにしても，本稿がきっかけとなり，行司の番付や房色などがさらに深

く追究されることを期待している。

なお，本稿では年月を表すのに英字のＭとかＴを使用しているが，それは明治時代や大正時代をそれぞれ表している。新聞でも『読売』とか『報知』と簡略化し，「新聞」や「新報」を省略している。場所名も「春場所」や「夏場所」の代わりに１月や５月と表すこともある。夏場所が例外的に「６月」となるのは，明治42年夏場所である。相撲の国技館が開館する前は，晴天興行のため開催期間が伸びることもあった。出典を表すとき，「～を参照」と表してあるが，実際は他にも参考文献はある。他の参考資料を知りたければ，拙著『伝統と変化』でもいくらか見られる。本稿の内容は基本的にその『伝統と変化』と同じだからである。

２．明治30年以降の番付（資料）

立行司は草履を履き，短刀を差し，熨斗目麻裃を着用していた。番付表では立行司の場合，そのことを記していない。立行司の房色は必ずしも紫房ではなかったので，房色は記してある。たとえば，式守与太夫が明治31年５月，式守伊之助（９代）を襲名してしばらくは朱房だった。紫白房になったのは明治37年５月である。木村庄之助も総紫になったのは明治43年５月であり，その前は准紫房だった。その准紫房の前は紫白房だった。すなわち，最初から総紫ではなかったのである。

朱房行司は草履を履く場合，〈朱・草履〉とし，草履を履かない場合は，〈朱〉あるいは〈朱・足袋〉としてある。紅白房と青白房は足袋を履くが，その房色だけを記してある。幕下以下は43年１月までは〈黒〉とし，その後は〈黒・青〉としてある。青房が使われたのは，43年５月以降である。

（１）明治30年春場所

〈准紫〉庄之助（15代），〈紫白〉伊之助（８代）｜〈朱・草履〉誠道〈初代〉，

瀬平〈６代〉｜（朱，足袋），与太夫（４代）｜〈紅白〉亘り，銀治郎，庄三郎，米蔵，小市｜〈青白〉一学，正吉，朝之助，藤治郎｜〈黒〉勇，…

- 庄之助（15代）は明治25年，地方場所で准紫房を許されている。『読売』（M25.6.8）の「西の海の横綱と木村庄之助の紫紐」を参照。それまでは紫白房だった。その後，本場所でも黙許で准紫房を使用していた。『萬』や『読売』（共にM25.7.15）の「寸ある力士は太刀冠に頭を打つ」を参照。しかし，これは協会だけの許しを受けたものらしい。『報知』（M32.5.18）の「行司紫房の古式」を参照。正式には明治31年に許されている[6]。吉田長孝著『原点に還れ』（p.135）や荒木精之著『相撲道と吉田司家』（p.200）を参照。
- 伊之助〈７代〉は紫白。『読売』（M30.2.19）の「式守伊之助初めて横綱を曳く」，『よろづ』（M30.2.18）の「式守伊之助の紫房」，『角力新報』（明治30年３月，p.50）の「式守伊之助の紫房」，『読売』（M30.2.18）の「回向院大相撲」を参照。
- 与太夫（４代）は30年１月場所から朱房を使用している。『読売』（M30.2.20）の「相撲だより」を参照。それまでは紅白房だった。
- 藤治郎は番付二段目に記載されていることから，青白房である。しかし，字は薄く，細い。星取表では最後の左端に記載されており，青白房となっている[7]。
- 番付３段目の勇，角太郎，源太郎，錦之助は字の薄さから幕下と捉えている。番付記載から判断した。

（２）明治30年夏場所

行司名の前にある記号「○」は昇格したことを表す。

〈准紫〉庄之助（15代），〈紫白〉伊之助（８代）｜〈朱・草履〉誠道，瀬平（６代）｜〈朱房・足袋〉与太夫（４代）｜〈紅白〉亘り，銀治郎，庄三郎，小市，○一学｜〈青白〉正吉，朝之助，藤治郎，○勇，○源太郎｜〈黒〉錦

之助，…

- 庄之助（15代）は30年９月に死去。『読売』（M30.9.24）の「相撲行司木村庄之助死す」を参照。
- 伊之助（８代）は30年12月に死去。『読売』（M30.12.19）の「式守伊之助の病死」を参照。
- 勇と源太郎はこの場所で青白房に昇格している。しかし，番付では字のサイズは大きいが，薄い字になっている。星取表二段目の左端に二人とも記載されていることから，この場所で青白房に昇格したと捉えている[8]。

（３）明治31年春場所

〈紫白・草履〉伊之助（８代），〈紫白・草履〉◯（誠道改め）庄之助（16代），〈朱・草履〉◯瀬平〈６代〉｜〈朱・草履〉◯与太夫（４代）｜〈紅白〉亘り，銀治郎，庄三郎，小市，一学｜〈青白〉正吉，朝之助，藤治郎，勇，（源太郎改め）宋四郎，◯錦之助｜〈黒〉与之吉，…

- 庄之助（16代）は30年12月に庄之助襲名が決まっていた。『読売』（M30.12.26）の「16代木村庄之助の免許」を参照。
- 番付の伊之助（７代）記載は史跡。
- 与太夫（９代）は春場所から草履を許されているが，立行司の襲名は夏場所である。『中央』（M31.1.17）の「相撲だより」を参照。
- 朝之助が翌５月場所，紅白に昇格していることから，一枚上の一学は今場所，先に紅白房に昇格していると捉えている。しかし，文献では裏付けとなる証拠を見ていない。
- 錦之助は青白房に昇格した。番付で字が太くなっている。
- 源太郎が宋四郎に改名している。『相撲の史跡（３）』の「木村宋四郎」（p.46）では改名のとき，幕内（紅白房）へ昇格したとしているが，本稿では兵役か

ら復帰後，33年５月場所に昇格したとしている。

（４）明治31年夏場所

〈紫白〉庄之助（16代），〈朱〉◯瀬平〈６代〉，〈朱〉（与太夫改め）伊之助（９代）｜〈紅白〉（亘り改め）庄太郎，銀治郎，庄三郎，小市，一学，◯（正吉改め）庄九郎，◯朝之助，◯藤治郎｜〈青白〉勇，宋四郎，錦之助，◯勘太夫｜〈黒〉大藏，…

- 与太夫は５月から伊之助（９代）を襲名した。しかし，房色は朱である。
- 庄九郎と朝之助は青白から紅白へ昇格した。『中央』（M31.2.1）の「相撲だより」や「読売」（M31.2.1）の「相撲彙聞」を参照。
- 藤治郎が復帰し，番付２段の左端に記載されている。紅白に昇格したと捉えている。しかし，それを裏付ける他の証拠はまだ見ていない。

（５）明治32年春場所

〈准紫〉庄之助，〈朱〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈紅白〉庄太郎，銀治郎，庄三郎，進，小市，一学，庄九郎，朝之助，藤治郎｜〈青白〉宋四郎，錦之助，勘太夫｜〈黒〉大藏，…

- 進はこの場所から番付に記載されている。幕内格である。
- 銀治郎は番付に記載されているが，初日の前日に行司を引退した。年寄峰崎となった。『都』（M32.1.10）の「名跡相続」や「時事」（M32.1.10）の「名跡相続」を参照。
- 番付表では大藏，錦太夫，久蔵の３名は黒房だが，星取表では３名とも最後のほうに記載されている。すなわち青白房扱いである。番付発表後に青白房に昇格したに違いない。松翁木村庄之助著『国技勧進相撲』（p.1）ではこの場所で青白房へ昇格したことになっているが，本稿では番付表記に従い，夏

場所で昇格したとして扱うことにする。

（6）明治32年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈紅白〉庄三郎，庄太郎，進，小市，一学，庄九郎，朝之助，藤治郎｜〈青白〉（錦之助改め）与太夫（5代），勘太夫，〇大藏，〇錦太夫，〇久蔵｜〈黒〉角治郎，…

- 瀬平は正式に3月に紫白房を許された。『読売』（M32.3.16）の「木村瀬平紫総を免許せらる」を参照。正式に5月場所から紫白房を使用している。『報知』（M32.5.18）の「行司紫房の古式」を参照。この紫白房はいわゆる伊之助の「真紫白房」と同じである。庄之助の「准紫房」とは異なる。
- 宋四郎は兵役のため番付に記載されていない。
- 大藏，錦太夫，久蔵の3名が青白房に昇格している。『国技』（T6.11，p.13），『国技勧進相撲』（昭和17年，p.1）を参照。
- 錦之助が与太夫に改名。『時事』（M32.5.18）の「木村瀬平と式守伊之助」や『日日』（M32.5.18）の「相撲行司の軍配」を参照。

（7）明治33年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈紅白〉庄三郎，庄太郎，進，小市，一学，庄九郎，朝之助，藤治郎，〇与太夫｜〈青白〉勘太夫，大藏，錦太夫，錦之助（3代）｜〈黒〉角治郎，…

- 与太夫は紅白房に昇格。22代木村庄之助著『行司と呼出し』（p.146）を参照。
- 庄三郎と庄太郎の順序入れ替えについては，『読売』（M33.1.2）の「行司の改良」を参照。
- 久蔵が錦之助に改名した。相撲史跡研究会編『相撲の史跡（2）』（昭和53年」）の「式守錦之助」（p.82）を参照。

（8）明治33年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈紅白〉庄三郎，庄太郎，進，小市，一学，庄九郎，朝之助，藤治郎，与太夫，〇勘太夫，宋四郎，大藏｜〈青白〉錦太夫，錦之助，〇角治郎，〇（金八改め）左門｜〈黒〉徳松，…

- 勘太夫は紅白房に昇格。『相撲人物事典』（p. 694）を参照。
- 宋四郎は5月に兵役から復帰する。年寄春日野を襲名し，二枚鑑札となる。『報知』（M33. 5. 17）の「回向院の大相撲（4日目）」，『相撲』（平成元年10月）の小池謙一筆「年寄名跡の代々（2））―春日野代々の巻」（pp. 142–5），『相撲』（平成5年9月／10月）の小池謙一筆「年寄名跡の代々（48／49）―入間川代々の巻（上／下）」を参照。
- 左門（金八改め）は青白房に昇格している。星取表では2段目の左端に表記されているし，番付表では3段目に角治郎と同じ字の大きさで記載されている。

（9）明治34年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈紅白〉庄三郎，庄太郎，進，小市，一学，朝之助，藤治郎，庄九郎，与太夫，勘太夫，宋四郎，大藏｜〈青白〉錦太夫，錦之助，角治郎，左門｜〈黒〉吉之助，…

『大阪毎日』（M34. 4. 7）の「大砲の横綱（立行司木村瀬平通信）」には，それぞれの行司へ授与された房色などが箇条書きでまとめられている。

- 木村瀬平　　一代麻上下熨斗目紫房着用の事
- 式守伊之助　　麻上下熨斗目赤房着用の事
- 木村庄三郎，木村庄太郎　　赤房着用の事
- 式守与太夫，式守勘太夫，木村宋四郎，木村大藏，式守錦太夫，式守錦之助

紅白房着用の事[9]

免許状の授与は必ずしも房色を新しく許すことを意味しない。たとえば，与太夫の紅白は33年１月，勘太夫や大藏の紅白は33年５月には使用許可が下りている。しかし，錦太夫や錦之助は新しい許可だったようだ。錦太夫は自伝『国技勧進相撲』（p.1）で35年１月に紅白房に昇格したと述べている。

（10）明治34年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈朱・足袋〉○庄三郎，○庄太郎[10]｜〈紅白〉進，小市，一学，朝之助，藤治郎，庄九郎，与太夫，勘太夫，宋郎，大藏｜〈青白〉錦太夫，錦之助，角治郎，左門｜〈黒〉○吉之助，…

- 進と小市は朱房に昇格した。『読売』（M34.5.22）の「進，小市の緋房」を参照。二人は場所中か場所後に使用許可が下りたに違いない。
- 吉之助は青白房に昇格している。『読売』（M42.2.14）の「行司吉之助の死去」を参照。番付表では，３段目の左端に記載されているが，青白房なのかどうか，不明である。星取表によると，吉之助は35年春場所，青白房に昇格しているので，番付発表後に昇格したのかも知れない。
- 伊之助は立行司である。もちろん，草履を履き，熨斗目麻裃を着用している。庄三郎は同じ朱房だが，立行司でもないし草履も履いていない。

（11）明治35年春場所

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈朱・足袋〉庄三郎，庄太郎，○進，○小市｜〈紅白〉朝之助，藤治郎，庄九郎，与太夫，勘太夫，宋四郎，大藏，○錦太夫，○錦之助｜〈青白〉角治郎，左門，角治郎，○吉之

助｜〈黒〉豊吉，庄吾，…

- 一学は１月，行司を辞職し，年寄若松となる。『読売』（M35.1.8）の「相撲のいろいろ」を参照。
- 錦太夫と錦之助は２月，紅白房に昇進した。『読売』（M35.2.9）の「相撲のいろいろ」や20代木村庄之助（元・錦太夫）の自伝『国技勧進相撲』（p.1）を参照[11]。
- 吉之助は星取表に基づき，この場所で青白房は番付表にも反映されていると捉えている。

（12）明治35年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈朱〉庄三郎，庄太郎，進，小市｜〈紅白〉朝之助，藤治郎，庄九郎，与太夫，勘太夫，宋四郎，大藏，錦太夫，錦之助｜〈青白〉角治郎，左門，吉之助｜〈黒〉庄吾，豊吉，…

- 庄九郎（前名・亘り）は７月に死去。
- 勘太夫と宋四郎は３段目中央にこの順序で同等に記載されている。

（13）明治36年春場所[12]

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈朱〉庄三郎，庄太郎，進，小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，藤治郎[13]，勘太夫，宋四郎，大藏，錦太夫，錦之助｜〈青白〉左門，角治郎，吉之助｜〈黒〉庄吾，豊吉，…

- 藤治郎は，本来なら左端に記載されるが，右端に記載されている。理由は不明だが，藤治郎に健康上の問題があったせいかもしれない。

(14) 明治36年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈朱〉庄三郎，庄太郎，進，小市｜〈紅白〉朝之助，藤治郎，与太夫，勘太夫，宋四郎，大藏，錦太夫，錦之助，左門，豊吉｜〈青白〉吉之助，角治郎，○庄吾｜〈黒〉豊吉，…

- 藤治郎は元の位置に戻っている。
- 『大阪朝日』(M36.5.29) の「大角觝見聞記」に行司番付と房色が提示されている。しかし，本場所の番付と異なる。
- 『毎日』(M36.11.5) の「常陸山・梅ケ谷横綱免許式」に「木村角治郎，式守錦之助，同錦太夫，木村左門 4 名に対する行司の免許を代理木村庄之助に渡し（後略)」とあるが，それぞれの階級や房色は示されていない[14]。
- 『角力雑誌』(T10.5) の江東門前子筆「勧進元評判記」(p.47) によると，庄吾は36年 5 月に青白房に昇格している。番付記載では 4 段目の左端になっていることから，番付発表後か場所中に昇格したかもしれない。翌 5 月場所番付では 3 段目の左端に記載されている。

(15) 明治37年春場所

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈朱〉伊之助｜〈朱〉庄三郎，庄太郎，進，小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，藤治郎，勘太夫，宋四郎，大藏，錦太夫，錦之助，◯角治郎，◯左門｜〈青白〉吉之助，庄吾，◯豊吉｜〈黒〉八郎，…

- 角治郎と左門は幕内格に昇格。『毎日』(M36.11.5) の「常陸山・梅ケ谷横綱免許式」を参照。
- 豊吉は青白房に昇格した。番付で 3 段目に左端に記載されている。他の資料では確認していない。
- 藤治郎は昨年12月に死去。中英夫著『武州の力士』(p.68) を参照。星取表で

も青白房扱いとなっている。

(16) 明治37年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈紫白〉伊之助｜〈朱・草履〉庄三郎，庄太郎，進，小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，勘太夫，宋四郎，大藏，錦太夫，錦之助，角治郎，左門｜〈青白〉吉之助，庄吾，豊吉｜〈黒〉八郎，…

- 伊之助は夏場所から紫白房を許された。『時事』（M37.5.29）の「行司の出世」や『都』（M37.5.29）の「紫白の房と上草履」や『日出国』（M37.5.29）の「櫓太鼓」を参照。
- 庄三郎は草履を許された。房の色は変わらず朱である。『時事』（M37.5.29）の「行司の出世」。

(17) 明治38年春場所[15]

〈准紫〉庄之助，〈総紫〉瀬平，〈紫白〉伊之助｜〈朱・草履〉庄三郎｜〈朱・足袋〉庄太郎，進，小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，勘太夫，宋四郎，錦太夫，錦之助，角治郎，左門，〇吉之助｜〈青白〉庄吾，豊吉｜〈黒〉清二郎，…

- 吉之助は１月場所に本足袋（紅白房）に昇格した。『日日』（M44.2.14）の「行司吉之助逝く」を参照。
- 大蔵は番付日記載されていない。
- 朝之助はこの場所まで紅白房だった。下位の与太夫や勘太夫が40年春場所，朱房に昇格していることから，朝之助はそのあいだに朱房に昇格していることになる。しかし，今のところ，その昇格年月は確認していない。そのため，40年春場所まで，紅白房として扱うことにする。これはいずれ修正しなければならない。

- 庄吾は依然として青白房である。紅白房に昇格したのは，39年５月である。

(18) 明治38年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉◯伊之助，◯〈紫白〉庄三郎[16]｜〈朱房・草履〉◯庄太郎｜〈朱・足袋〉進，小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，勘太夫，宋四郎，錦太夫，錦之助，角治郎，左門，吉之助｜〈青白〉庄吾，豊吉｜〈黒〉清二郎，八郎，…

- 庄三郎は紫白房に昇格。『時事』（M38.5.15）の「新立行司木村庄三郎」を参照。
- 庄太郎は５月場所より朱房と草履を許された。『読売』（M38.10.11）の「行司木村庄太郎死す」や『電報』（M38.5.21）の「土俵の塵―行司木村宋四郎」を参照。
- 庄太郎は10月に死去。『中央』（M38.10.11）の「行司木村庄太郎」を参照。
- 宋四郎は兵役で負傷し，行司に復帰する。『時事』（M38.5.21）の「名誉ある行司」や『電報』（M38.5.21）の「土俵の塵―行司木村宋四郎―」を参照。
- 瀬平〈６代〉が２月に死去。『読売』（M38.2.6）の「行司木村瀬平死す」を参照。

(19) 明治39年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱房・草履〉◯進，◯小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，勘太夫，宋四郎，錦太夫，錦之助，角治郎，左門，吉之助｜〈青白〉大藏，庄吾｜〈黒〉清治郎，…

- 進と小市は場所７日目，草履を許された。房色は従来と変わらず朱。『中外』（M39.1.21）の「行司の昇格」，『やまと』（M39.18）の「行司の進級」，『時事』（M39.1.22）の「行司の出世」を参照。

- 宋四郎は１月，行司を引退し，年寄春日野となった[17]。『日日』（M39.1.17）の「木村宋四郎の退隠」や『時事』（M39.1.9）の「木村宋四郎退隠」を参照。
- 清治郎は足袋を許された。『中外』（M39.1.21）の「行司の昇格」や『時事』（M39.1.22）の「行司の出世」を参照。星取表では，まだ黒房扱いである。番付表でも隣の庄吾より字が小さく，薄くなっている。翌場所に昇格は反映されている。
- 豊吉は番付表に記載されていない。

（20）明治39年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助｜〈紫白〉庄三郎｜〈朱房・草履〉進，小市｜〈紅白〉朝之助，与太夫，勘太夫，錦太夫，錦之助，大藏，角治郎，左門，吉之助，〇庄吾｜〈青白〉〇清治郎｜〈黒〉八郎，…

- 錦之助は９月に死去。相撲史跡研究会編『相撲の史跡（２）』（昭和53年」）の「式守錦之助」（p.82）や『相撲』編集部編『大相撲人物大事典』（ベースボール・マガジン社，平成13年）の「行司の代々」（p.700）を参照。
- 庄吾は５月，本足袋に昇格した。『角力雑誌』（T10.5，p.47）の「木村瀬平」を参照。行司を続けながら，年寄木村瀬平を続けた。二枚鑑札[18]。大藏は復帰し，紅白房となる。『電報』（M39.5.11）の「番付に就いて」を参照。
- 清治郎は青白房に昇格している。青白房は清治郎のみである。

（21）明治40年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱房・草履〉進，小市｜〈朱・足袋〉〇朝之助[19]，〇与太夫，〇勘太夫｜〈紅白〉錦太夫，大藏，角治郎，吉之助，庄吾｜〈青白〉清治郎｜〈黒〉八郎，…

- 小市は草履を許された。『日日』（M40.1.17）の「相撲雑俎」や『やまと』（M

40.1.18の「出世行司」を参照[20]。

- 与太夫と勘太夫は朱房に昇格した。『中外』（M40.1.8）の「大相撲だより」，『日日』（M40.1.17）の「相撲雑俎」，『やまと』（M40.1.18）の「出世行司」を参照。
- 左門は40年１月から43年まで相撲界を離れている。
- 八郎と善治郎は青白房に昇格した。『日日』（M40.1.17）の「相撲雑俎」や『やまと』（M40.1.18）の「出世行司」を参照。番付発表後かも知れない。

（22）明治40年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱房・草履〉進，小市｜〈朱〉朝之助，与太夫，勘太夫｜〈紅白〉錦太夫，錦之助，角治郎｜〈青白〉吉之助，庄吾，清治郎，◯八郎，◯（善治郎改め）善明｜〈黒〉鹿之助，…

- 八郎は不祥事（窃盗）で，行司を辞める。『日日』（M40.5.21）の「相撲行司の賊」を参照。

（23）明治41年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱房・草履〉進，誠道｜〈朱〉朝之助，与太夫，勘太夫｜〈紅白〉錦太夫，大藏，角治郎，吉之助，庄吾｜〈青白〉清治郎，善明｜〈黒〉鹿之助，…

- 善明が元の善治郎に改名している。

（24）明治41年夏場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱〉進，（小市改め）誠道｜〈朱〉朝之助，与太夫，勘太夫｜〈紅白〉錦太夫，大藏，角治郎，吉之

助，庄吾｜〈青白〉清治郎，善明｜〈黒〉鹿之助，…

- 小市が誠道に改名している。

（25）明治42年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎，｜〈朱〉進，誠道｜〈朱〉朝之助，与太夫，勘太夫｜〈紅白〉錦太夫，大藏，角治郎，吉之助，庄吾｜〈青白〉清治郎，善明，〇鹿之助｜〈青白〉留吉，…

- 番付表では青白房と黒房の間に広い空白がある。星取表では鹿之助が青白房の最下位となっている。

（26）明治42年夏場所（６月）

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱〉進，誠道｜〈朱〉朝之助，与太夫，勘太夫｜〈紅白〉錦太夫，大藏，角治郎，吉之助，庄吾｜〈青白〉清治郎，善明，（鹿之助改め）留五郎，〇留吉｜〈青白・黒〉鶴之助，…

- 錦太夫と大藏は共に朱房に昇格。『朝日』（M42.2.10）の「行司の出世」を参照。
- 留吉，与之吉，啓二郎は格足袋に昇格した。『朝日』（M42.2.10）の「行司の出世」を参照。

（27）明治43年春場所

〈准紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱〉進，誠道｜〈朱〉朝之助，与太夫，勘太夫，〇錦太夫，〇大藏｜〈紅白〉角治郎，吉之助，庄吾｜〈青白〉清治郎，善明，留五郎，留吉，〇鶴之助｜〈黒〉（亀司改め）錦

之助，…

- 庄之助は紫，伊之助は紫白，庄三郎は紫白と決まる。『都』(M43.4.29) の「庄之助の跡目」を参照。
- 清治郎は3月，紅白房に昇格。『武州の力士』(pp.66-7) の「木村清次郎」を参照。明治43年3月付の免許状では「上足袋」となっている[21]。
- 鶴之助は青白房に昇格している。番付では留吉と同じ大きさの字で記載されている。ところが，星取表では名前が記載されていない。つまり，黒房扱いである。番付表と星取表では扱いが異なる。それは翌年の1月まで続いている。なぜ番付表記と星取表の扱いが異なるのか，今のところ，不明である。本稿では，番付表に基づき，鶴之助は青白房だったとする。実際，鶴之助と錦之助（黒房）との間には大きな空白があり，字の大きさも明確に異なっている。

(28) 明治43年夏場所[22]

〈総紫〉庄之助，〈紫白〉伊之助，〈紫白〉庄三郎｜〈朱・草履〉進，誠道｜〈朱・足袋〉朝之助，与太夫，勘太夫，錦太夫，〇大藏，〇角治郎，〇吉之助｜〈紅白〉庄吾，清治郎，左門，〇善明｜〈青白〉留吉，鶴之助｜〈黒・青〉錦之助，…

- 立行司の房色が決まった。木村庄之助は総紫，式守伊之助は（真）紫白房となった。
- 伊之助（9代）は昨年6月に死去。番付記載は死跡。
- 角治郎は朱房に昇進。『角力雑誌』（T10.5）の「勧進元評判記」(p.47) を参照。
- 吉之助は5月，朱房に昇進。『日日』（M44.2.14）の「行司吉之助逝く」を参照。

- 大藏が朱房に昇格。『報知』（M43.5.31）の「行司の新服装」を参照。
- 左門は復帰。『相撲』（平成４年12月）の小池謙一筆『年寄名跡の代々（40）―立田川代々の巻』（pp.154–7）参照。
- 清治郎は青白房の免許状（M43.3の日付）を受けた。その写しが中英夫著『武州の力士』（pp.66–7）に掲載されている。
- 善明は紅白房に昇格した。『報知』（M43.5.31）の「行司の新服装」や『毎日』（M43.5.31）の「相撲行司の服制」を参照。
- 鶴之助を青白房とする理由は，42年春場所の項で述べている。

（29）明治44年春場所

〈総紫〉庄之助（16代），〈紫白〉伊之助（９代），〈紫白〉庄三郎｜〈朱・草履〉進，誠道｜〈朱・足袋〉朝之助，与太夫，勘太夫，錦太夫，大藏，〇角治郎，〇吉之助｜〈紅白〉庄吾，清治郎，左門，善明｜〈青白〉留吉，鶴之助｜〈黒・青〉錦之助，…

- 庄三郎は２月，伊之助襲名が決まった。『都』（M44.2.22）の「相撲だより」を参照。
- 進は２月，紫白を許された。『都』（M44.2.22）の「相撲だより」を参照。
- 吉之助は２月に死去。『読売』（M44.2.14）の「行司吉之助の死去」や『日日』（M44.2.14）の「行司吉之助逝く」を参照。
- 庄吾は２月に朱房昇格。『都』（M44.2.22）の「相撲だより」や『日日』（M44.2.22）の「力士の給金直し」を参照。
- 鶴之助を青白房とする理由は，42年春場所の項で述べている。

（30）明治44年夏場所[23]

〈総紫〉庄之助（16代），〈紫白〉（庄三郎改め）伊之助（10代），〈半々紫白〉進｜〈朱・草履〉誠道｜〈朱・足袋〉朝之助，与太夫，勘太夫，錦太夫，大

藏，角治郎，◯庄吾｜〈紅白〉清治郎，左門，善明｜〈青白〉留吉，鶴之助，◯錦之助｜〈黒・青〉竹二郎，…

- 進は紫白房を許されている。それは半々紫白である。第三席で准立行司。『日日』（M44.6.12）の「大相撲評判記」や『時事』（M44.6.10）の「相撲風俗（8）―行司」を参照。
- 格足袋以上の行司に関しては，『中央』（M44.6.13）の「天下の力士（二）―行司の養成」を参照。
- 朝之助は6月，草履を許された。房色は朱房のまま。『読売』（M44.6.25）の「行司の昇進と昇給」）を参照。
- 錦之助は格足袋に昇格した。『読売』（M44.5.25）の「角界雑俎」を参照。
- 鶴之助は星取表でも青白房として扱われている。繰り返しになるが，番付表では43年1月以降，青白房として表記されている。

（31）明治45年春場所

〈総紫〉庄之助（16代），〈紫白〉）伊之助（10代），〈半々紫白〉進｜〈朱・草履〉誠道，◯朝之助｜〈朱・足袋〉与太夫，勘太夫，錦太夫，大藏，角治郎，庄吾，清治郎｜〈紅白〉左門，善明，留吉，鶴之助，◯錦之助｜〈黒・青〉竹二郎，…

- 庄之助（16代）は1月，死去。『読売』（M45.1.7）の「行司木村庄之助死す」や『日日』（M45.1.15）の「明治相撲史―井村庄之助の一代」を参照。
- 伊之助（10代）は庄之助襲名。『やまと』（M45.1.12）の「行司の襲名」を参照。
- 進が式守伊之助を襲名。『やまと』（M45.1.12）の「行司の襲名」を参照。
- 誠道は1月場所，朱房のまま。『日日』（M45.1.12）の「行司誠道は懲戒か」を参照。『読売』（M45.1.12）の「相撲だより」に誠道が5日目に紫白房にな

ると書いてあるが，実際には許されていないはずだ。『夕刊中央』（M45.1.18）の「誠道処分の内決」を参照。

- 与太夫が草履を許された。朱房のまま。『やまと』（M45.1.12）の「行司の襲名」や『読売』（M45.1.12）の「相撲だより」を参照。
- 留吉は１月場所中，紅白房を許された。『読売』（M45.1.19）の「相撲だより」や『やまと』（M45.1.19）の「行司の昇級」を参照。

（32）明治45年夏場所

〈総紫〉（伊之助改め）庄之助（17代），〈紫白〉（進改め）伊之助（11代）｜〈朱・草履〉誠道，朝之助｜〈朱・足袋〉与太夫，勘太夫，錦太夫，大藏，角治郎，庄吾，清治郎｜〈紅白〉左門，善明，◯留吉｜〈青白〉鶴之助，錦之助，竹治郎，◯啓治郎｜〈黒〉金吾，…

- 伊之助（10代）は庄之助襲名。『読売』（M45.5.13）の「庄之助・伊之助の昇格式」を参照。
- 進が式守伊之助を襲名した。『国民』（M45.5.12）の「新番付節用」や『やまと』（M45.5.12）の「行司の襲名」を参照。
- 竹治郎と啓治郎は青白房に昇格した。『やまと』（M45.1.19）の「行司の昇級」や『時事』（M45.1.18）の「行司の出世」を参照。

３．星取表の行司

明治期の星取表には青白房以上が記載されている。二段目の左端の行司が青白房の最下位となる。黒房行司は記載されていないので，青白房と黒房の境を知るのに，貴重な資料となる[24]。しかし，番付表と星取表の階級はときどき異なることがある。それは，一つには番付表は場所前に作成されているのに対し，星取表は場所後に作成されているからである。もう一

つは，房色の変更が不定期だったことによる。他にもいろいろな，たとえば休場などのような理由があったかもしれない。

本稿では青白房と黒房を必ずしも番付表に基づいて分析しているわけでないが，基本的にはそれに基づいている。したがって，場所中に房色が変更になった場合，それは翌場所に反映されることになる。本稿の分析では青白房の最下位行司が星取表と一致しないものがいくつかあるので，それを示しておく。これ以外は星取表と一致する。

	星取表	本稿
• M36年５月	吉之助	庄吾
• M43年１月	留吉	鶴之助
• M43年６月	留吉	鶴之助
• M44年２月	留吉	鶴之助
• M44年６月	鶴之助	錦之助

いずれが事実に即しているかは，検討する必要がある。番付表と星取表には時間差あり，必ずしも番付表の階級に基づいているわけでもなさそうである。明治期には新聞記事にも房色の変更に関する記事が多いことから，その資料などとも照合する必要がある。

４．今後の課題

本稿は主として房色の種類で行司の階級を表してきたが，房色は階級と直結しているからである。行司の格付けは房色によって表すが，それだけで格付けがなされていたわけではない。以前は，装束や着用具にも違いがあった。たとえば，立行司は短刀を携帯し，熨斗目麻裃を着用していたが，下位の行司はそれを許されていなかった。昔も今も，行司の格付けで変わ

らないのは，房色である。

本稿では房色で階級を区分けしているが，その色分けは事実を正しく反映しているだろうか。今後は，それを検討しなければならない。主として，明治時代の資料を活用して房色で区分けしているが，資料の適用は正しいだろうか。資料の年月と番付表の記載とどの程度一致し，どの程度一致しないのか，今後は検討を要する。実際，異なることが散見されるからである。

資料に基づいて区分けしていても，すべての行司の房色がわかったわけではない。中には前後の行司と比較したり，番付表を検討したりしている。たとえば，木村朝之助は立行司にもなり，文献でもしばしば登場するが，朱房がいつ許されたのか，本稿の執筆段階ではわからなかった。前後の行司を考慮し，明治38年５月から40年１月のあいだに違いないが，どの場所なのかを確定する資料が見つからないのである。そういう行司の房色がわからないと，房色による区分けは不完全なものになる。そういう意味で，資料にない行司の区分けは，今後も注意する必要がある。本稿で資料が提示されていない行司の場合，今後はそういう資料を見つけることである。

註

1　本稿の作成では，特に星取表に関し，両国相撲博物館（中村史彦さん）と相撲趣味の会の野中孝一さんに大変お世話になった。中村さんには明治30年以降と大正期の星取表から行司一覧の最後の行司を全部教えていただいた。野中さんには星取表に青白房以上の行司が記載されていることを教えていただき，さらに星取表のコピーも何枚かいただいた。相撲談話会の多田真行さんには，いつものように，原稿を送付し，貴重なコメントをもらった。お世話になった３名の方々に，改めて感謝の意を表しておきたい。

2　異なる階級のあいだには明確な空間がある場合もあるし，そうでない場合もある。それが一定していない。特に紅白房と青白房の場合，その区分けが難しい。

3　傘型記載の番付で階級の見分けが難しくても，行司の序列自体は横列記載の番付と何ら変わりない。左右交互に行司は記載されているからである。半端な行司は，基本的に左端に記載される。

4　紅白房と草履を履かない朱房が幕内行司であることは，たとえば『時事』(M44.6.10)の「相撲風俗（８）―行司」や『都』(M44.6.17）の10代目式守伊之助談「行司になって四十四年」を参照。

5　本稿では，当時の新聞や相撲関連の雑誌や書籍などに基づいて年月や房色を提示している。もちろん，番付表も大いに活用してある。しかし，番付と文献には年月に関し，一致しないこともある。その大きな要因の一つは，当時，房色使用は許可時期が一定していなかったからである。そういう場合，どれを採用するかに関し，一定の基準はなく，ときには新聞記事に，ときには番付表に基づいている。

6　庄之助（15代）は30年９月に亡くなっているので，31年は何かのミスに違いない。これに関しては，たとえば拙著『大相撲立行司の名跡と総紫房』(2018）の第１章「紫白房と准紫房」(pp.1-34）でも言及している。

7　明治30年春場所，夏場所，31年春場所の星取表は，『角力新報』(M30.7と31.8）に掲載されている。ちなみに，酒井忠正著『日本相撲史（中)』にも星取表は掲載されているが，中央の欄に行司は掲載されていない。

8　『相撲』(平成元年10月）の小池謙一筆「年寄名跡の代々（２）―春日野代々の巻」(pp.142-5）や『相撲』(平成５年10月号）の小池謙一筆「年寄名跡の代々数字（49）―春日野代々の巻（下)」(pp.150-3）によると，宋四郎（すなわち源太郎）はこの場所（31年１月）で幕内に昇格している。確かに，番付表では勇，宋四郎，錦之助の３名は太字になっている。しかし，源太郎（すなわち宋四郎）は勇と共に前場所（30年５夏場所)，十両に昇格している。30年１月場所は幕下だった。本稿では，そのように捉えている。いずれが正しく事実を反映しているか，今後もさらに追究する必要がある。

9　錦太夫と錦之助の紅白房免許は35年春場所に出されている。34年春場所には青白房の免許だったのかもしれない。そうでないと一貫性がないことになる。34年春場所には錦太夫と錦之助は青白房である。「本足袋」(紅白房）と「格足袋」(青白房）の区別が明確でないので，全員が紅白房のような扱いになっている。たとえば『読売新聞』(M34.4.8）の「木村瀬平以下行司の名誉」）には「足袋並びに紅白房」とあるが，「足袋」が「格足袋」を意味しているのか不明である。たとえ「格足袋」だとしても，どの行司が格足袋で，どの行司が「本足袋」(紅白房）なのかは区別できない。

10　庄三郎と庄太郎は34年夏場所以前から朱房になっていたかもしれないが，その確認が取れない。それで，この夏場所から朱房に昇格したものとする。進と小市が庄三郎と庄太郎とほぼ同じ時期に同じ朱房を使用するとするのは不自然である。同じなら，34年４月に同じ免許が授与されたはずだからである。伊之助の赤房や立行司の装束もずっと以前に決まっていた。

11　相撲史跡研究会編『相撲の史跡（２)』(昭和53年」）の「式守錦之助」(p.82）には，明治38年５月に幕内（紅白房）へ昇格したとあるが，これは正しくないはずだ。

12　この春場所に関しては，『朝日』(M36.3.29）の番付リストも参照。

13　番付表では与太夫，藤治郎の順になっているが，星取表では藤治郎，与太夫の順に入れ替わっている。星取表では，このような異なる順序付けがときおり見られる。何か理由があるはずだが，本稿ではそれを調べていない。休場とか差し違えの数などがあるが，他にも理由があるかもしれない。

14　あえて推測すると，錦之助と錦太夫は35年１月に許された紅白房の免許であり，角治郎と左門は37年１月から紅白房を許されるという免許だったかもしれない。その真偽は，今のところ，不明である。

15　この春場所に関しては，『時事』（M38.1.22）の番付リストも参照。

16　庄三郎の紫白房は伊之助の房色とまったく同じと捉えている。そのことについては，たとえば拙著『大相撲行司の格付けと役相撲の並び方』（2023）の第８章「准立行司と半々紫白房」でも詳しく扱っている。

17　年寄春日野は大正15年１月，年寄入間川になった。『相撲』（平成５年10月号）の小池謙一筆「年寄名跡の代々数字（49）―春日野代々の巻（下）」を参照。

18　この行司・庄吾の行司歴については『相撲』（平成９年１月号）の小池謙一筆「年寄名跡の代々（88）―木村瀬平代々の巻（下）」も参照。

19　朝之助は39年春場所から40年春場所のあいだに朱房に昇格しているはずだが，その年月を確認できない。そのため，40年春場所に昇格したとしてある。もしかすると，39年夏場所に昇格しているのかもしれない。

20　『春場所相撲号』（T12.1）の12代目式守伊之助談「四十六年間の土俵生活」（pp.108-11）にも行司歴が記されている。

21　大正２年３月付の免許状では「団扇紐紅色」（p.6）と記載されてることから，「上足袋」は紅白房を意味しているに違いない。

22　この夏場所に関しては，『毎日』（M43.5.31）の行司リストも参照。

23　この場所に関しては，『中央』（M44.6.13）の番付リストも参照。

24　明治30年から45年までの星取表の最後の行司に関しては，相撲博物館の中村史彦さんに大変お世話になった。行司一覧の最後の行司が知りたい旨のお手紙を送付したが，それに応えてその行司を丹念に調べ，郵送してくれた。ここに改めて，感謝の意を表しておきたい。

参考文献

主として明治時代と大正時代の番付表，新聞，雑誌などを参考にしてある。活用した資料や文献は本文中に示してある。ここでは，書籍のみを記す。

荒木精之，『相撲道と吉田司家』，相撲司会，1959（昭和34年）。
上司延貴，『相撲新書』，博文館，1899（明治32年）。
木村庄之助（20代，松翁），『国技勧進相撲』，言霊書房，1942（昭和17年）。
木村庄之助（21代），『ハッケヨイ人生』，帝都日日新聞社，1966（昭和41年）。

木村庄之助（22代）・前原太郎（呼出し），『行司と呼出し』，ベースボール・マガジン社，1957（昭和32年）。
式守伊之助（19代，高橋金太郎），『軍配六十年』，1961（昭和36年）。
『相撲』編集部，『大相撲人物大事典』，ベースボール・マガジン社，2001（平成13年）。
竹森章（編），『相撲の史跡』，相撲史跡研究会，1973（昭和48年）～1993（平成５年）。
中秀夫，『武州の力士』，埼玉新聞社，1976（昭和51年）。
根間弘海，『詳しくなる大相撲』，専修大学出版局，2020（令和２年）。
根間弘海，『大相撲の神々と昭和前半の三役行司』，専修大学出版局，2021（令和３年）。
根間弘海，『大相撲立行司の格付けと役相撲の並び方』，専修大学出版局，2023（令和５年）。
山田野理夫，『相撲』，ダヴィッド社，1960（昭和35年）。
吉田長孝，『原点に還れ』，熊本出版文化会館，2010（平成22年）。